

ウォルター・ペイターと 『キリストにならいて』について(1)

布施 伸之

「この世にあらざるをもって旨とす。」

序論にかえて

これまでペイター(Walter Pater, 1839-94)が、キリスト教精神の真髓と見做されている *Of the Imitation of Christ* (『キリストにならいて』)との連関で論じられたことは、わたしの知る限りなかった。それは一つには、ここ数十年のペイター・ブームに煽られて、研究者たちが論ずべき問題があまりにも多く、そこまで手が回らなかったこと、そしてもう一つには、このようなキリスト教とペイターとの関係など言わずもがなの問題であり、そしてたとえ言うべきことがあったとしても、精々一言か二言で言い尽くせる類の問題であると誰しも思ってきたからであろう。実際、『キリストにならいて』についてのペイターの言及はほんの数箇所にとどまり、敢えて問題とするほどの価値もないように見える。さらに、ペイターがキングズ・スクールを出てオックスフォードの学生になってから、キリスト教関係の本をことごとく処分し、キリスト教に熱心に帰依していた頃作った詩をほとんど燃やしてしまったこと、そしてその後はヴォルテール(Voltaire, 1694-1778)ばりの揶揄で、キリスト教を辛辣に非難するようになったという伝記的な事実によって、そのような問題はさほど取り立てるほどのことでもあるまいと大抵の研究者が素通りしてきたからであろう。わたしもその一人であったのだが、しかし“Pico della Mirandola”(「ピコ・デッラ・ミランドラ」)を丹念に読んでいくうちに、ある問題に逢着し、どうやらこの問題の出所が『キリストにならいて』にあるこ

とに気付き、それを機にこれについて調べてみることにした次第である。今回の論考では特に、“Diaphaneité”における『キリストにならいて』の受容の在り方を中心にして論をすすめ、あわせてそのような視点でとらえられた“Diaphaneité”と *The Renaissance* (『ルネサンス』)との密接な関係にも触れてみたい。以上が本論のねらいである。

1

中世キリスト教精神を最もよく伝えている『キリストにならいて』は、キリスト教文学において、聖書に次いで最も影響力を及ぼしてきた著書として広く知られている。それは四巻から成り、第一巻が15世紀の初め1410年に書かれ、第四巻が完成したのは1441年であるという。第一巻から三巻までは修道院における精神生活上の実践的戒めが述べられ、第四巻は聖体の秘蹟について書かれている。著者に関しては現在でも議論がなされているようだ〔註1〕が、ほぼトマス・ア・ケンピス(Thomas a Kempis, 1379/80-1471)という修道僧ということで落ち着いているようだ。彼は、ドイツのラインラント地方に生まれ、ネーデルラントで名の知られた教育機関、後にドイツ中世期の代表的神秘思想家ニコラウス・クザーヌス(Nicolaus Cusanus, 1400/1-64)が学ぶことになる、デフェンテルの共同生活兄弟団で教育を受けた後修道僧となり、92歳で亡くなるまで、黙想と祈祷、読書と著述とによる70余年の静かな隠遁生活を過ごした。『キリストにならいて』は、著者自身と修道僧たちとの修練と信心の道を究めるために、キリストの愛の教えに倣って、自らをむなしくして、観照的生活の実践で得られる純粋な信仰を通して「人間の魂とその源泉との合一」〔註2〕、そしてキリストとの精神的合一つまり救済を目的として書かれたものである。『キリストにならいて』がその後、修道僧だけでなく多くの一般のキリスト教信徒から愛読されるに至ったのは、それが、晦渋な神秘主義とはかけ離れた、穏やかな神秘的気分に覆われていること、純理論的、神学的というより情緒的

であること、そして適度に禁欲的で内面的であることによる。〔註3〕

実のところペイターが『キリストにならいて』について言及している個所はそれほど多くはない。全集すべてについて当たったわけではないので他にもまだあるかもしれないが、主に

- ① 1864年7月朗読された“Diaphaneite”（「透けている性格」）と題されたエッセイ
- ② 1871年10月 *Fortnightly Review*（『フォートナイトリー・レビュー誌』）で発表された「ピコ・デッラ・ミランドラ」
- ③ 同年11月同誌上で発表された“The Peotry of Michelangelo”（「ミケランジェロの詩」） ②と③とは、後に1873年、*Studies in the History of the Renaissance*（『ルネサンス』）中に収録刊行されたことは周知の通りである。
- ④ 1893年刊行された、*Plato and Platonism*（『プラトンとプラトン哲学』）の第二章 “Plato and the Doctrine of Rest”（「プラトンと静の学説」）

この四個所を挙げるができる。こうして見ると、頻度は少ないが、その言及はペイターの精神活動の全期間にわたっており、それが生涯を通して彼の知的関心事の一つであったことは間違いないようだ。

ところで、キリスト教精神の鑑とも言えるこの『キリストにならいて』とペイターとは一見相入れない者同士と考えられ易いのである。なるほど、幼年時代のペイターは、牧師になることを望み、周りからもそれを期待され、しばしば妹たちを従えて自ら牧師の役を演じる遊びに興じていたということであるし、またカンタベリーのキングズ・スクール在学中も、「四旬節には肉食を断ち、毎晩ラテン語の祈祷文を唱え、定められた聖務日課を几帳面に守る」〔註4〕といった具合で、日々、恭順な気持ちにあふれた、偽りのない信仰中心の生活を送る、真面目で、友人にも親切な少年であったが、その後、キングズ・スクールの最終学年の1857年頃から、徐々に信仰心が薄れ、1860年にはキリスト教及び信仰に関する書物をことごとく処分し、代わって哲学書を読み始め、〔註5〕そして1864年から1873年頃、すなわちペイターがオックスフォードのブレイズ

ノウズ・コレッジのフェローとなり、『ルネサンス』初版を出した頃には、あからさまなキリスト教批判が当人の口から発せられているのが伝えられているからである。Lawrence Evans 編の *Letters of Walter Pater* の序文には、そのような例としてハンフリー・ウォード夫人(Mrs. Humphry Ward)の要約が挙げられている。それによれば、ペイターはある女性に向かって、

...no reasonable person could govern their lives by the opinions or actions of a man who died eighteen centuries ago. [註6]

と、述べたということである。また、牧師職を目ざしていた真面目な友人等によって密かに、ペイターがキリスト教を信じていないのに牧師職を希望していると告発され、その後、ロンドン主教の警告によってその希望を断念したと伝えられている。[註7]

さらには、

That monastic religion of the Middle Age was, in fact, in many of its bearings, like a beautiful disease or disorder of the senses: and a religion which is a disorder of the senses, must always be subject to illusions. [註8]

のように、中世の修道院での宗教を「美しき病ないし感覚の混乱のようなもの」と述べ、『キリストにならいて』の生まれた母胎・環境に否定的な見方を公然と表わしている。以上のようなことから、キリスト教精神の真髄とも見做しうる『キリストにならいて』をどのようにペイターは受容し、彼の著作にどのように反映させているのかを明らかにすることはペイター研究における興味のないテーマの一つであることは確かである。

初めに “Diaphaneite” における『キリストにならいて』からの引用が含まれている箇所を挙げてみる。

“Sibi unitus et simplicatus esse,” that is the long struggle of the Imitatio Christi. The spirit which it forms is the very opposite of that which regards life as a game of skill, and values things and persons as marks or counters of something to be gained, or achieved, beyond them. It seeks to value everything at its eternal worth, not adding to it, or taking from it, the amount of influence it may have for or against its own special scheme of life. It is the spirit that sees external circumstances as they are, its own power and tendencies as they are, and realises the given conditions of its life, not disquieted by the desire for change, or the preference of one part in life rather than another, or passion, or opinion. The character we mean to indicate achieves this perfect life by a happy gift of nature, without any struggle at all. Not the saint only, the artist also, and the speculative thinker, confused, jarred, disintegrated in the world, as sometimes they inevitably are, aspire for this simplicity to the last. [註9]

“Diaphaneite” というエッセイは、1864年7月、オックスフォード大学内ではよく知られていた文学サークル‘Old Mortality’で朗読されたものである。ペイターは、その前年そのサークルに入会が認められ、既に一度1864年2月に “A hymn of praise to the absolute” と題して [註10] 自作のエッセイを朗読しているようだが、その原稿は散逸してしまい、わたしたちにはその内容を

知ることができない。〔註11〕従ってこの“Diaphaneitè”はペイター二度目の朗読ということになる。この性格はペイター独自の創案によるものであるが、ベンスン(A. C. Benson)によれば、これは彼の友人シャドウェル (Charles Lancelot Shadwell, 1840-1919)を基に入念に造型されたとのことである。〔註12〕

ペイターによれば、この性格が形成する精神は、時流に流されたり、世俗的な栄達を追い求めたりすることとはおよそ正反対なものであるという。自分の好悪の都合に左右されて先入見をつけ加えたりまた差し引いたりせずに、事物を永遠の価値で評価し、自分の置かれた外的状況があるがままに眺めることができる。それは、また、変化を強く求めたり、生における特定の役割や情熱や見解への偏愛によって、気が散じられることもないので、その固有な生に必要な諸条件を築きあげることができる。生まれながらにその性格をもった人には、そのような完璧な生を、造作もなく成就することができるが、聖人や芸術家や純理論的な思想家さえも時に世間の喧騒に乱されて、その簡素な生を持続させることは難しく、生涯にわたってそれを求めるのだという。この性格は、とりわけ芸術家にとっては稀なもので、というのも、芸術家には、ダンテのベアトリーチェにおいて見られるような至高の道徳的魅力が稀であるからだという。それは世間の時流に従うのではなくそれを横切る「光の鋭い刃先」である。そこにおいて普通の人性の道徳的要素は洗練され燃焼点にまで達するのであるという。世間はその性格を理解するほどの繊細な感覚を持っていないので、この無色な、未だ分類されていない純粋な生を、便宜的に利用することもできないし、また理想像として追い求めることもできないという。diaphaneitèという性格が、世の人々の中に見つけられないばかりでなく、聖人や芸術家や思想家にも稀で、至高の道徳的魅力としてベアトリーチェのなかに求めることができるくらいである、というので、なかなかその性格の本質を把握することが容易ではないが、その本質を最も簡潔に表現している文言が *Sibi unitus et simplicatus esse.* (「人が自分と一つになり、内において単純となること」)

[註13] という『キリストにならいて』からの援用なのである。生憎ラテン語の原書が入手出来なかったので、これが原著者の著したままの文言か、あるいはペイターが手を加えて援用しているのかは確かめられなかったが、関連部の英訳と邦訳とを挙げてみると、

The more a man is united within himself, and becometh inwardly simple and pure, so much the more and higher things doth he understand without labour; for that he receiveth intellectual light from above.

A pure, sincere, and stable spirit is not distracted, though it be employed in many works; for that it works all to the honour of God, and inwardly being still and quiet, seeks not itself in any thing it doth.

Who hinders and troubles thee more than the unmortified affections of thine own heart? [註14]

「人が自分と一つになり、内において単純となるにつれ、彼はいよいよ苦勞なしに、いっそう多くのさらに高いことを悟るようになる。なぜならば彼は上からの知恵の光をうけるからである。純^{きよ}らかで精神の直^{なお}く確固とした者は、いろんな仕事に気を散らすことはしない。なぜかという、彼はすべてを神の栄光のために行ない、身を安息に持し、自身のどんな要求にも煩わされまいとつとめるからである。心中の抑^{おさ}えきれない情念以上に、あなたを妨げ苦しめるどんなものがあるか。」 [註15]

と、なっている。今問題として取り上げている、Sibi unitus ... の箇所以外にも、例えば、

A pure, sincere, and stable spirit is not distracted, though it be

employed in many works;

と、初めに引いた “Diaphaneitè” 中からの引用部の、

...the spirit..., not disquieted by the desire for change, or the preference of one part in life rather than another, or passion, or opinion.

との連関が指摘でき、ペイターの『キリストにならいて』への思い入れの一端を知ることができるのであるが、それは後に触れるとして、『キリストにならいて』の著者のここでの意図をより鮮明にするために、別の箇所からもその手がかりを求めるならば、

MY son, the more thou canst go out of thyself, so much the more wilt thou be able to enter into Me.

As to be void of all desire of external things, produceth inward peace, so the forsaking of thyself inwardly, joineth thee unto God.
〔註16〕

If thou wilt be My disciple, deny thyself utterly. If thou wilt possess a blessed life, despise this life present. 〔註17〕

MY son, thou canst not possess perfect liberty unless thou wholly renounce thyself. 〔註18〕

MY son, trust not to thy feeling, for whatever it be now, it will quickly be changed into another thing. 〔註19〕

と、あるように、現世的なものからの超脱・解放、あるいは肉にかかわる一切の人間性の否定〔註20〕によって、何物にも煩わされずに、自身の内部にある純真な精神との合一をはかることを意味しているようだ。そしてこれが神との究極的な合一に達する前提条件となっているのである。以上が『キリストにならいて』における *Sibi unitus et simplicatus esse.* のおよその意味である。これに反してペイターの場合は、現世超脱や自己否定とは正反対の態度だ。とは言え俗世間的な喧騒から離れ、静観のうちに、私利私欲や偏愛や先入見とは無縁な純一な自己と向き合い、事物を、自他の利害のためではなく、それ自体のためにあるがままに眺め静思する態度である。両者はともに観照的・観想的な態度であるが、『キリストにならいて』のそれは、世界からの超脱をはかる手段であるのに対して、ペイターの場合には、敢えて超越的な領域に立ち入らずに〔註21〕、この世界にとどまり、世界に内在している〔註22〕隠された真実、つまり、雑然とした人間の営みのなかに潜む精神上的の純粹な核または理念を見抜こうとする手段である。このあたりまでくると、明らかに、ドイツ哲学に関するペイターの知識が背後に透けて見えてくるのであるが、『キリストにならいて』からもう少し引くことで、いかにペイターはそれから多くを取り入れているかがわかるであろう。

The greatest Saints avoided the society of men, when they could conveniently, and did rather choose to live to God, in secret.〔註23〕

He therefore that intends to attain to the more inward and spiritual things of religion, must with JESUS depart from the multitude and press of people.〔註24〕

Keep thyself as a stranger and pilgrim upon the earth, and as one to whom the affairs of this world do nothing appertain.

〔註25〕

‘THE Kingdom of God is within you’, saith the Lord. Turn thee with thy whole heart unto the Lord, and forsake this wretched world, and thy soul shall find rest.

Learn to despise outward things, and to give thyself to things inward, and thou shalt perceive the Kingdom of God to come in thee. 〔註26〕

Unless too a man be set free from all creatures, he cannot with freedom of mind attend unto divine things.

For that is the reason why there are few contemplative men to be found, because few have the knowledge to withdraw themselves fully from perishing creatures. 〔註27〕

And unless a man be elevated in spirit, and freed from all creatures, and wholly united unto God, whatsoever he knoweth, and whatsoever he hath, is of no great weight. 〔註28〕

これら『キリストにならいて』からの引用を見ただけで、“Diaphaneité”を執筆する上で、ペイターがどんなにこれを頼りにしていたかが判読できるであろう。だが、『キリストにならいて』の著者にとって、*Sibi unitus et simplicatus esse*. における窮極の目的は自己救済という利害が絡んでいるのに対して、ペイターのそれは、ある意味で最も利己的と見なし得る信仰をも含めた一切の事物あるいは対象を、あるがままに把握しようとする手段である。

そこには、超然とした無関心さとさえ言えるほどの透徹した境地が伺われるのであり、修道僧以上のより厳しい観照の態度あるいは決然たる達観の態度が伺われるのである。そしてこの境地が、より純粹に達するにつれ、この性格の持ち主は、他者から見ると、あたかもそこに存在していないかのように映るのである。(as he comes nearer and nearer to perfection, the veil of an outer life not simply expressive of the inward becomes thinner and thinner. [註29]) ペイターはこの世の見巧者に徹するために、ことばの純然たる意味において、この世にあらざるをもって旨とすることを決断したのである。Sibi unitus et simplicatus esse. とは以上のように捉えて初めてその真意を掴むことが可能となるのである。

3

ところで以上のようなペイターのSibi unitus et simplicatus esse.から連想できるのが *The Renaissance* の序文中にあるアーノルド(Matthew Arnold, 1822-88)から援用した一節、To see the object as in itself it really is. (対象をそれ自体あるがままに眺めること)であろう。これまで、これが“Diaphaneité”あるいはSibi unitus et simplicatus esse.と関連して言及されたり論じられたりしたことはなかったように思う。このように両者を結びつけることによって、“Diaphaneité”と *The Renaissance* との有機的な繋がりが新たに見えてくるのである。すなわち、この世を眺める見巧者のあるべき究極の姿がSibi unitus et simplicatus esse.にあると先に論じたが、この言説を理論と見なすならば、その理論に基づく実践上の言説がアーノルドの一節であると言えよう。すると“Diaphaneité”と *The Renaissance* とを、精神活動開始のための理論とその実践としてペイターは思い描いていたのではないかという仮説が浮上してくるのである。この仮説を裏付けるために、まず“Diaphaneité”からその結びの段落を引用したい。

People have often tried to find a type of life that might serve as a basement type. The philosopher, the saint, the artist, neither of them can be this type; the order of nature itself makes them exceptional. It cannot be the pedant, or the conservative, or anything rash and irreverent. Also the type must be one discontented with society as it is. The nature here indicated alone is worthy to be this type. A majority of such would be the regeneration of the world. [註30]

ここではdiaphaneitéの本性の持ち主は、人々がしばしば求めてきた生の最も基底をなすタイプと同一視されている。このタイプは社会に不満を持っていて、このタイプの数を増すことが「世界の再生」に繋がるという。ペイターがA majority of such would be the regeneration of the world.という文でこのエッセイを結んでいることは非常に注目し得る。diaphaneitéを持った人々が「世界の再生」(the regeneration of the world)の役割を担っているというのである。ところでShorter Oxford English Dictionaryによれば、regenerationにはrenascenceの語義が古くからあり、このrenascenceがrenaissance (Renaissance)の同義語として用いられるようになったのは1869年からのことだという。これはペイターがこのエッセイを朗読して5年後にあたるが、このような回りくどい説明を俟つまでもなく、regenerationがRenaissanceを連想させる語であることはペイターの研究者であれば誰しも気づくであろう。すなわち、ペイターはこれを執筆しながら*The Renaissance*の構想を暖めていたのであろう。だからこれを朗読した翌年、すなわち1865年、“Diaphaneité”のモデルとなったシャドウエルを伴ってラヴェンナ、ピサ、フィレンツェを巡るイタリア旅行に出発したのであった。これは全く当然の帰結であったのだ。

ところで、少し横道にそれるかもしれないが、ペイターの伝記作家ベンスンはどうやら“Diaphaneite”の真意を掴んでいなかったようである。かれらのイタリア旅行について次のように述べている。

In 1869 he took a tour in Italy with Mr. Charles Lancelot Shadwell, his closest and most intimate friend. They visited Ravenna, Pisa, and Florence, and it was then that art became for him the chief preoccupation of his inner life. [註31]

[1869年というのはベンスンの過ちである。(筆者記す)]

そしてこの直後ベンスンはとってつけたように、“Diaphaneite”の話題に入り、それについての彼の見解を一ページ余りにわたって述べているのである。すなわち、このように年代を取り違えて、前後逆さまに記述していることからわかるように、ベンスンはイタリア旅行と“Diaphaneite”とは何らの繋がりが無いものとして、両者の関連を見過ごしている。そしてこの誤った認識は、芸術が彼の主要な関心事として彼の精神生活に占めるようになったがこのイタリア旅行の最中であったと述べることで、さらに悪化させ、さらには、シャドウェルを同伴させたことも、his closest and most intimate friendという表現から推測するに、ベンスンの興味本位で淫靡な好奇心が顔を覗かせていて、ここまでくると、私などベンスンは何を一人で妄想し血迷っているのかと思えてくるのであるが、とにかくこのベンスンの誤謬の溝はさらに広がるばかりである。というのも、“Diaphaneite”に関する彼の見解[註32]が済んだ直後、次のように述べているからである。

In these years Pater's chief interest, apart from his prescribed work, was in philosophy, which naturally led him to the German authors; and here he fell under the influence of Goethe. [註33]

断るまでもないが、このhis prescribed workとはオックスフォードのブレイズノウズ・コレッジでのフェローの職務を指している。それはともかく、このように続けることによって、ペイター研究者たちに、“Diaphaneitè”はドイツ思想との連関で捕らえれば事足りりという拙速な結論を下させてきたのではなかろうか。こういう次第であるので、“Diaphaneitè”は『キリストにならいて』との関連で解釈されることなく今日にいたっているのである。ベンスンの誤謬はペイター初期の作品間の関連性、特に“Diaphaneitè”と *The Renaissance* との有機的な連関を探る上で今日まで大きな障害となってきたのである。

さて本題に戻そう。先ほどdiaphaneitèをもった人が世界の再生の役割を担っていると述べ、*The Renaissance* との密接な連関を指摘したのであるが、このdiaphaneitèの持ち主たちこそ *The Renaissance* 中の主題として扱われているレオナルド・ダ・ヴィンチをはじめとする芸術家や、思想家のピコ・デッラ・ミランドラ、あるいは美術史家ヴィンケルマンらの実在の人物たちであり、またオーカッサンやニコレットなどの創作中の主人公たちなのである。例えば“Leonardo da Vinci”には以下の部分がある。

The *Duomo*, work of artists from beyond the Alps, so fantastic to the eye of a Florentine used to the mellow, unbroken surfaces of Giotto and Arnolfo, was then in all its freshness; and below, in the streets of Milan, moved a people as fantastic, changeful, and dreamlike. To Leonardo least of all men could there be anything poisonous in the exotic flowers of sentiment which grew there. It was a life of brilliant sins and exquisite amusement: Leonardo became a celebrated designer of pageants; and it suited the quality of his genius, composed, in almost equal parts, of curiosity and the

desire of beauty, to take things as they came. [註34]

“Leonardo da Vinci” という評論は、美は相対的であるべきだというペイターの観念が形象化された作品である。上述箇所は、レオナルドが宗教的倫理的先入観から離れ、相対的な美へ歩む決定的な瞬間を伝えている部分である。これを機に、かれはその天才を構成している二つの要素、すなわち、好奇心と美への願望とを一致させた作品を矢継ぎ早に完成させていくのである。レオナルドの天才をその核心にまで見事に突き、しかもそれをこのように精妙に表現し得たペイターの筆力には驚くほかない。ここの部分は、言うまでもなくアーノルドの言説To see the object as in itself it really is.の実例であるが、同時に“Diaphaneité”にある、It is the spirit that sees external circumstances as they are, [註35]とも重なっている。さらに、

…yet he is so possessed by his genius that he passes unmoved through the most tragic events, overwhelming his country and friends, like one who comes across them by chance on some secret errand. [註36]

は、“Diaphaneité”の

The character we mean to indicate achieves this perfect life by a happy gift of nature, without any struggle at all. [註37]

と関連している。また、“Winckelmann”には、ヴィンケルマンが古代人の理想的な作品を観照することで芸術研究の新しい感覚を開き、人間精神のために新しい器官を創始した一人としヘーゲルが絶賛したという一節がある。これは、現実に不満をもって古代人の美的精神を復活させた点で、“Diaphaneité”に

おける「世界の再生」(the regeneration of the world)の典型事例といえる。またこの目的のために、ヴィンケルマンが学校の教師の職を辞し、さらにはバチカンでの研究のためにカトリックに改宗した記述には、

It is the spirit that...realises the given conditions of its life, not disquieted by the desire for change, or the preference of one part in life rather than another, or passion, or opinion. [註38]

が投影されている。また“Pico della Mirandola”は、私見によれば『キリストにならいて』をペイターが知らなかったならば、現在あるような形にはならなかったのではないかと思う作品である。これについては稿を改めて論じたいと思っているが、“Diaphaneité”との連関を述べれば、ヒューマニストとしてのピコの尽きることのない魅力は、

In the character before us, taste, without ceasing to be instructive, is far more than a mental attitude or manner. A magnificent intellectual force is latent within it. It is like the reminiscence of a forgotten culture that once adorned the mind; as if the mind of one *φιλοσοφήσας ποτε μετ' έρωτος*, fallen into a new cycle, were beginning its spiritual progress over again, but with a certain power of anticipating its stages. [註39]

の中にすでに述べられている。このように“Diaphaneité”と *The Renaissance* の各エッセイとの密接なつながりは他にも指摘できるが、ここで *The Renaissance* のエピグラフ *Yet shall ye be as the wings of a dove* について述べてみたい。これも『キリストにならいて』との結びつきで論じることができるように思える。ところで *The Renaissance* の精緻な註釈で知られて

いるHillは、このエピグラフについて以下のような註をつけている。

“Though ye have lain among the pots, yet shall ye be as the wings of a dove covered with silver, and her feathers with yellow gold” – Psalms 68:13. A study of this psalm will yield no easy understanding of the reason why Pater took from it the words which serve as the epigraph for his book. He must have had in mind Pico della Mirandola’s happy use of the image in his prayer to the “ultramundane spirits” in the opening lines of the “Proem” to the third book (“Of the Angelic and Invisible World”) of his *Heptaplus* (1496): “Thus far we have discussed the celestial world, unveiling the mysteries of Moses to the best of our ability. Who will now give me the wings of a dove, wings covered with silver and yellow with the paleness of gold? I shall fly above the heavenly region to that of true repose, peace, and tranquility, especially that peace which this visible and corporeal world cannot give. Unveil my eyes, you ultramundane spirits, and I shall contemplate the wonders of your city, where God has laid up for those who fear him what the eye has not seen, nor the ear heard, nor the heart thought” – *Omnia Quae Extant Opera* (Venice, 1557), p. 3 (trans. Carmichael, p.106). [註40]

ヒルはこのようにピコとの関連で解決をはかろうとしているわけだが、彼自身まだ腑に落ちないようだ。なるほど“Pico della Mirandola”は恐らくペイターが *The Renaissance* のエッセイの中で最も力を入れた作だと思うが、私には、「超世界の聖霊」(the ultramundane spirits)に捧げた祈りの中でピコが引いた聖書からの一節を、ペイターが *The Renaissance* 全体のエピグラフとして

用いるとは考えにくいように思えるのだ。この根拠は、“Diaphaneite”中のSibi unitus et simplicatus esse. についての考察の結論から判るように、ペイターが超越的な世界の事象に関して決然と下した判断停止による。したがってそうした文脈にある文言をエピグラフとしてペイターが援用するはずがないのである。私は、これは『キリストにならいて』から来ていると思っている。ただし丸ごとの援用ではない。『キリストにならいて』には以下の一節がある。

O LORD, I stand much in need of yet greater grace, if I ought to reach that pitch, where neither man nor any creature shall be a hindrance unto me.

For as long as any thing holds me back, I cannot freely take my flight to Thee.

He was longing to fly freely who said, ‘O that I had wings like a dove, and I will flee away and be at rest!’ [註41]

見てわかるように、ペイターが引いている聖書の詩篇（68の13）とは別の詩篇（55の6）が援用されている。実は上記とは別にもう一箇所詩篇の55の6からの引用が『キリストにならいて』にあるが、68の13からの引用はない。これでは根拠はないに等しいと思えるであろうが、詩篇の55の6ではこの世から逃避し、神の元へ飛んでゆく手段として鳩の翼を希求しているのである。すなわち、これも先ほどの理由と同様に超越的な事象に関するペイターの判断停止との係わりで詩篇の55の6を援用するわけにはゆかない事情が働いているのである。とは言え *The Renaissance* 成立の基盤をなしている『キリストにならいて』に対するペイターの厚い感謝に何らの疑いはないのである。そのしるしとして、詩篇68の13をもって代用しているのではなかろうか。ところで、先ほどのヒルの註釈からわかるように、ピコは詩篇68の13と詩篇55の6とを混同して引いているので、ペイターも『キリストにならいて』

にあるのが詩篇68の13のものであったと取り違えてしまった可能性は捨てきれない。こうしたことから、私自身も、ヒル同様明確な判断を出せないのであるが、少なくともピコの *Heptaplus* よりも『キリストにならいて』と関連づけて解決をはかるほうがよいように思えるのである。

以上“Diaphaneité”と *The Renaissance* との密接な繋がり的一端を述べてきたが、これに関して、次の章でどうしても論じておかなければならないのが、*The Renaissance* を献呈され、ペイターの死後作品管理を引き受けたシャドウェルについてである。

4

『ルネサンス』〔註42〕がシャドウェルに献呈された事の次第をヒルは、

He (Shadwell) was Pater's companion in 1865 on his first trip to Italy, where they visited Ravenna, Pisa, and Florence. As a token of their friendship and in memory of this trip, Pater dedicated *Studies in the History of the Renaissance* to 'C. L. S.' 〔註43〕

と注釈している。“Diaphaneité”に関しての言及がないのは私としてはやはりもの足りない。この『ルネサンス』初版刊行以降オックスフォードにおけるペイターの立場が微妙になり、一頃はペイターにギリシャ語の個人指導まで買って出たプラトンの碩学ジャウエット (Benjamin Jowett, 1817-93) との間の溝がますます深まり、さらにペイターの同性愛を臭わす手紙がジャウエットの手に入るにつれて、シャドウェルとペイターとの交際は、かつてほど開放的というわけにはいかなくなったが、シャドウェルはペイターの生涯を通して彼の人と仕事とに最も理解を示していた同時代人であると言えるであろう。どのような経緯で引き受けることになったのか私たちには知られてはいないが、ペイター

死後作品管理の任務を引き受けたのも、格別の厚誼に対する感謝の念からばかりでなく、判断停止を決断した人間の、壮絶な産みの苦しみを伴った、三十年余りの創作活動を傍らで見つめてきた一同時代人としての誠意と責務からであったのは間違いあるまい。そのようなシャドウェルの思いをよく伝えているのが、1895年、作品管理者としての最初の仕事、すなわち *Greek Studies* の刊行に寄せた序文である。その中で彼は、ペイターの個人的な美点について語るのはこの場ではふさわしくないが、彼を見たことのない人々にとって彼を知る手がかりとなる作品の価値について少しく述べることは許されるであろう、と前置きした後、以下のように述べ、その序文を結んでいる。

Persons only superficially acquainted, or by hearsay, with his writings, are apt to sum up his merits as a writer by saying that he was a master, or a consummate master of style; but those who have really studied what he wrote do not need to be told that his distinction does not lie in his literary grace alone, his fastidious choice of language, his power of word-painting, but in the depth and seriousness of his studies. That the amount he has produced, in a literary life of thirty years, is not greater, is one proof among many of the spirit in which he worked. His genius was "an infinite capacity for taking pains." That delicacy of insight, that gift of penetrating into the heart of things, that subtleness of interpretation, which with him seems an instinct, is the outcome of hard, patient, conscientious study. If he had chosen, he might, without difficulty, have produced a far greater body of work of less value; and from a worldly point of view, he would have been wise. Such was not his understanding of the use of his talents. *Cui multum datum est, multum quaeretur ab eo.* Those who wish to

understand the spirit in which he worked, will find it in this volume. [註44]

序文の前半を占めるエッセイの初出等の解説に伺われる、正確を期す学者的な淡々とした語り口とは対照的に、ここには抑制された筆遣いの行間から、シャドウエルの万感の思いが滲み出ている。上記の書き出し部には、ペイター文学に対する表層的な見方しか出来ない当時の人々の無理解が仄かされている。彼によれば、ペイターの天才は「数々の苦痛を引き受ける無限の受容力」であるという。そして傍目には彼の本能に見える、洞察力の精妙さ、事物の核心を貫くあの天賦の才能、解釈の靈妙さ、これらは、困難で、忍耐の要する、そして良心的な研究の成果であるという。このように、ペイターの本質を知悉していたシャドウエルは同時代人の無明さには多くを語らず、代わって後代の読者にペイター文学の真価の解明を託すべく、当代の数少ない理解者の一人としてその一助とならんがために、万感の思いで短い序文を寄せたのであろう。

以上のシャドウエルの思いは、本稿で取り上げている“*Diaphaneité*”を巡る一連の彼の行動にも明確に現れているのである。このエッセイは、周知のように *Greek Studies* 刊行後シャドウエルの手によって同年出された *Miscellaneous Studies* に収録されている。その序文の中でシャドウエルは“*Diaphaneité*”に関して以下のように心情を吐露している。

It is with some hesitation that the paper on *Diaphaneité*, the last in this volume, has been added, as the only specimen known to be preserved of those early essays of Mr. Pater's, by which his literary gifts were first made known to the small circle of his Oxford friends. [註45]

ペイターの了承を得ることなしにそれを収録することに、今でも何がしか躊躇

しつつも、シャドウエルが収録を決断したのは、初期のエッセイで収録に値すると認められる唯一のものであると判断したからである。それは勿論後の作品との有機的な関連性を考慮に入れた際、ペイターの文学活動の原点としてこの作品が欠くことができないと彼が見抜いたからであろう。シャドウエルの見識がなかったなら、わたしたちにはペイター思想の核心を知らずに足元が覚束無いまま、それ以降の諸作品を研究しなくてはならなかったのである。

ペイターに対するシャドウエルの思いについて、もう一つどうしても触れておかねばならない問題が残っている。それはペイターが少年時代を過ごしたカントベリーのキングズ・スクールに“Diaphaneite”の手書きの清書原稿が保管されている件に関してである。Inman によれば、W. H. P.と署名され、July, 1864と日付が付されているとのことだ。また、一部綴り字にアメリカ語法等が見られるものの、*Miscellaneous Studies* に収録されている作品と、ほぼ同じことば遣いになっていること、そして各ページの右隅に、古い写本の様式に倣って、次のページにある最初の単語が書かれているという。この後インマンは以下のように続けている。

The handwriting is not that of any of Pater's hands that I have seen in letters or rough manuscripts. The handwriting and the Oriel stamp have led me to conclude that the only known manuscript of “Diaphaneite” is a transcription made by Shadwell. [註46]

すなわち、キングズ・スクールにある原稿はペイター自筆のものではなく、シャドウエルの手になるということである。そうなると、現在 *Miscellaneous Studies* に収録されている“Diaphaneite”もペイター本人の原稿から起こしたものではない可能性もでてくるのであるが、例えば、シャドウエルが著しく加筆修正したということは、先ほど見てきた *Greek Studies* の序文に伺われる彼の心情からして考えにくいので、*Miscellaneous Studies* 中に「何がしか

躊躇しつつ」(with some hesitation)“Diapaneite”を収録したのは、このようなことに起因した戸惑いではないと見るべきで、やはり先述したような理由からと考えてよいと思う。いずれにせよ、この原稿がどのような経緯で発見されたのかも明らかになっていないので、これ以上述べることは憶測にしかならないが、ただシャドウェルがペイターに代わって清書した“Diaphaneite”の原稿をキングズ・スクールにシャドウェルがなぜ送ったかということは少しく述べても、憶測にはあたらないであろう。

晩年、ペイターが1894年7月30日に亡くなるまで、シャドウェルとの交際は以前ほど頻繁ではなかったのは、以前触れた通りである。しかし両者のお互いを気遣う気持ちは、以前とほとんど変わりはなかったようだ。ペイターが大学での職を辞して数年後の1890年に、オクスフォードのダンテ協会の会員に選ばれたのは、恐らく、すでに1877年に入会していたシャドウェルの推薦があったからであろう。ペイターのほうも、シャドウェルがダンテの煉獄篇の翻訳を出版するに際して、便宜をはかり、当時マクミラン出版社の経営を伯父アレグザンダー・マクミラン (Alexander Macmillan) から引き継いでいたフレデリック・マクミラン (Frederick Macmillan) に宛てて、シャドウェルの翻訳の見本を添えて、ペイター自身のものを出版するのと同じ条件で出版してもらえよう、依頼状を1892年4月に書き送っている。〔註47〕 シャドウェルの翻訳はその年の11月に出版されたのである。ダンテ学者として名を成し、後にオリオル・コレッジの学寮長にまで上り詰めることになるシャドウェルが重要な歩を踏み出すその背をペイターが押してあげたのである。そのペイターが亡くなり、“Diaphaneite”の手書き原稿が彼の手元に入った時、シャドウェルにはそれを出版するだけでは収まらない気持ちが込み上げてきたのでであろう。彼に代わってこの清書原稿を作り、この中に形象化されている精神が育まれた母胎のキングズ・スクールにそれを戻すのがペイターの一番望んでいることではなかろうかと思ったのである。そしてこの作品の中で二人が一体化していたように、シャドウェルは自分自身の手で清書することで、かつての一体感をこの原稿という

物それ自体に付与させ、併せてシャドウエルの所属学寮オリオル・コレッジの学寮印を押して、自分が係わっていることの客観的な証しとして残したのである。したがって私はこの手書き原稿は、恐らく、シャドウエルがオリオル・コレッジの学寮長に就任した後作成されたのではないかと推測している。シャドウエルは、ペイター文学の特徴の一つを成している回帰性をよく知っていたのであろう。*The Renaissance* に収められている“Two Early French Stories”中のアミとアミルのように二人はこの手書きの原稿の中で永遠に憩うているのである。*Miscellaneous Studies* 刊行をシャドウエルの公的な仕事と見なすなら、こちらは彼の極めて私的な思い入れから発した行為であったと言えよう。

結びにかえて

Edward Thomas はその著 *Walter Pater* の中で、以下のように書いている。

He remained in Oxford, taking private pupils for a year or two. Then in 1864 he was elected to a fellowship at Brasenose College and went into rooms, a small sitting-room and a tiny bedroom—at the south-east corner of the front quadrangle, commanding the Radcliffe Camera from an oriel window. [註48]

修道院が廃止されて久しい19世紀のイギリスにあって、大学の学寮は隠棲の場として機能していたようだ。というのも当時のイギリスはアーノルドの言うように、野蛮な貴族、俗悪な中産階級、そして愚かな下層民から成る社会であったから、世間から距離を置く場がペイターには必要であったのである。とはいえ勿論当時のオックスフォード大学は未だニューマン (John Henry Newman, 1801-90) らが始めたオックスフォード運動の名残りが燻ぶっていたし、ダーウィン (Charles Robert Darwin, 1809-82) の『種の起源』 (*On the*

Origin of Species, 1859) の発表以来、騒然としていたので、とても隠棲できる状況にあったとは思えないが、しかしそうであるからこそペイターはその喧騒の解決を図るためにそれから離れ、自己の生の基盤を求めて思索し、自己の信じる観念を具象化する場として「狭い居間兼書齋とちっぽけな寝室」が必要であったのである。その悪戦苦闘の末産み出されたものが、“Diaphaneité” という基盤であり拠りどころであった。そして“Diaphaneité” で主張されている the regeneration of the world (世界の再生) という結論を具体化させた事例が *The Renaissance* であった。であるから *The Renaissance* は単なるルネサンス期の文化事象の評論ではない。世界を再生させた人々なり文化事象に彼はより関心があったのである。従来のルネサンスの概念の枠を超えてその言葉を用いたと彼が述べているのは、こういう事情によるのである。それと、世界の再生をするということは、再生しなくてはならない根拠がなくてはならないので、当然中世というルネサンス期に先立つ時代の状況も随所に触れられているのである。そして世界の再生に貢献した、自分に先立つ時代の人々ないし文化事象の事例を、「それ自体あるがままに」(cf. to see the object as in itself it really is)、「この世になきがごとき自分が、永遠の価値で、検証することで」(cf. “Diaphaneité” の Sibi unitus et simplicatus esse. 及び to value everything at its eternal worth)、19世紀イギリス及びヨーロッパの抱えていた様々な問題の解決を図る手がかりを探ろうとしたのである。こういう次第で *The Renaissance* の各主題には19世紀当時の関心事が投影されているのである。〔註49〕このように、主題の背後に書き手の真意を読み取れるという点で、*The Renaissance* のほとんどの評論は象徴詩が持つ特徴をも兼ね備えている。これは彼がよく親しんでいたロマン派の詩から学んだに違いあるまい。こういう理由でペイターは批評を芸術に高めた人といわれているのである。

ところで、彼の永遠の価値観に立つ文化事象の捉え方は、単に中世、ルネサンスそして当時の現代(19世紀)という枠にとどまらない。*The Renaissance*

の“Leonardo da Vinci”には次の一節がある。

But finished or unfinished, or owing part of its effect to a mellowing decay, the head of Jesus does but consummate the sentiment of the whole company—ghosts through which you see the wall, faint as the shadows of the leaves upon the wall on autumn afternoons. The figure is but the faintest, the most spectral of them all. [註50]

これは“Diaphaneité”の以下の部分が投影されている。

The artist and he who has treated life in the spirit of art desires only to be shown to the world as he really is; as he comes nearer and nearer to perfection, the veil of an outer life not simply expressive of the inward becomes thinner and thinner. [註51]

すなわちペイターはイエスとその使徒らをdiaphaneitéの性格をもった人々、つまり世界の再生に与った「人たち」と見なしているのである。そして「なかでもイエスはもっとも霞んで、もっとも幽霊のようだった」とペイターが述べているのは、イエスを幽霊に見なしたとしてペイターを良く思わない人々に格好の攻撃材料を提供するためではなくて、世界を再生した人々の中で最も完璧な例証として、イエスを高く評価しているからなのである。つまり、判断停止をし、超越的な事物と決別して、この世の事象の理解に徹したペイターは、イエスを、当時ローマ帝国の支配下で人頭税に喘ぎ、さらに形式主義の蔓延る形骸化したユダヤ教によって救済の道を閉ざされて見捨てられ、いわば二重の苦しみによって人間性を無視されていた民衆のために、世界を再生した「人」として捉えているからだ。このようにペイターはイエスとその時代までも視野に

入っていたのである。

さて、本論1で触れたように、中世修道院の宗教を「美しき病のようだ」と非難した人間が、他ならぬ中世修道院で書かれたものを自己の生の理論的根拠として援用するはずがないと決めてかかる人がいるかもしれない。あるいは青りんご色の派手なネクタイをしてオックスフォードを闊歩しながら、ヴォルテール張りの辛辣さでキリスト教やキリストに対する冒瀆的な発言をしていたと、実際目にもし、耳にもしたという確かな証言があるのに、そんな男がどうしてキリストを世界の再生を果たしたとして高く評価することなどあり得るのか、あるいは『キリストにならいて』の著者のような厳格で禁欲的な隠棲をしていたなど想像出来るだろうかと言う人もいるだろう。一般的に世間のいう「実像」などは、研究者たちが期待するほど当てにできるものではない。それは各自が自分の胸に手を当てて考えれば、普段自分がいかに本心を隠して人と接しているか思い至って納得できるはずであるが、これに関してはプルースト (Marcel Proust, 1871-1922) が書いたサント＝ブーヴ (Charle-Augustin Sainte-Beuve, 1804-69) に対する反論から引用すれば、さらに納得できるのではないか。

つまり一冊の書物は、私たちがふだんの習慣、交際、さまざまな癖などに露呈させているものとは、はっきり違ったもうひとつの自我の所産なのだ。

〔註52〕

つまり、ここに偉大な天才がいるとして、この天才と肉体を共有しつつ生きている「人間」のほうは、実は天才とはなんの関係もないと言っていいほどで、親友たちが識っているのはこの「人間」のほうなのですね。だからサント＝ブーヴのように、ひとりの詩人を、その「人間」や、友人たちの証言で評価するのなどは、愚劣きわまることなのです。「人間」は要するにただの人で、自分のなかに生きている詩人が何を望んでいるのか、まるで分かっ

ていないこともあるのですから。〔註53〕

さて、ペイターにとって世界の再生が起こるのは、人間ないし人間性が何物かによって圧迫されたり、あるいは脅かされている時である。それらは帝政支配下の形式主義に墮落したユダヤ教しかり、中世の強権主義的キリスト教しかり、そして彼の時代、人間の主体を侵害していた合理主義あるいは実証主義もそれらの一つである。〔註54〕 そういう訳で中世の修道院の宗教が「美しき病のようだ」〔註55〕と見なされたのである。イエスに対する中傷と思しき発言は、ペイターがなぜ信仰から遠ざかったのかが解明されなければ理由がはっきりしない。ここではそういう問題には立ち入っていないので、今は保留にするしかない。ただ、彼は幼児期に父親を亡くしており、次いで、キリスト教に熱心に帰依して、断食を行いラテン語の祈祷などの聖務日課を欠かさなかったキングズ・スクール在学中に、母親を亡くしている。恐らくそうした極めて個人的なものと結びついているのではなかろうか。しかし超越的事象あるいは信仰に関しては判断停止をしても、彼は人間イエスを最も高く評価し、イエスに最も範を仰いでいた。“Diaphaneite”は、イエスを人間として解釈しなければならなかったペイターが、苦しみ抜いた末たどり着いた理論であった。恐らくキングズ・スクール時代に最も親しんだであろう『キリストにならいて』から多くを取り入れ、自作の主要な骨格として援用したのはそういう事情からであろう。このように人間イエスに範を仰ぎ、イエスに近づこうとしたペイターの思いを、最も良く伝えている証拠が残されている。それは、画家であった親しい友人シメオン・ソロモン (Simeon Solomon) によって1872年に描かれたペイターの素描画である。神々しい気品の漂う、静寂をたたえた表情を捉えた画である。正視してはいないが幾分斜め前方を見つめている目と、口ひげから覗く下唇には、静かなうちに決然とした意志が窺える。しかしその全体はまるで、先程引用したイエスの描写のように、画用紙の中に「透けて」(diaphanous) しまいそうである。この世に無きがごとく生きたペイターは、この画の中でイエスと重

なっている。シャドウェルとソロモンという二人の親友のお陰で私たちは、ペイター文学の深奥部に存在する、永遠に迷宮入りとなったかもしれないキリスト教精神を把握できたのである。

後記

本稿は2003年10月、日本ペイター協会での発表を基に加筆したものである。

尚、拙論冒頭のエピグラフは恩師神田孝夫先生の葬儀の折、弔辞で披露された先生の信条である。先生が何故ペイターを授業で取り上げられたのか、ようやく解りかけてきた今日この頃である。先生にこの拙論を捧げます。

使用したテキスト

Walter Pater. *The Renaissance; Studies in Art and Poetry*, The 1893 Text, edited, with Textual and Explanatory Notes, by Donald L. Hill, University of California Press, Berkeley, Los Angeles, London, 1980.

Walter Pater. *Greek Studies*, Macmillan, London, 1920.

Walter Pater. *Miscellaneous Studies*, Macmillan, London, New York, 1895.

William E. Buckler, ed. *Walter Pater : Three Major Texts*, New York University Press, 1986.

Walter Pater. *Plato and Platonism*, Macmillan, London, 1910; repr. Basil Blackwell, Johnson Reprint Corporation, Oxford, New York, 1973.

Thomas a Kempis. *Of the Imitation of Christ*, The World Classics, Oxford University Press, London, New York, Toronto, 1951.

註

〔註1〕 ヴェンツラッフ＝エッケベルト 『ドイツ神秘主義』 p. 173.

〔註2〕 同書 p. 15.

〔註3〕 この辺りは *Encyclopaedia Britannica*, (1968) の *Imitation of Christ* および Thomas a Kempis の項目、 および岩波文庫『キリストにならいて』の解説を参考にした。

〔註4〕 富士川義之 『ある耽美主義者の肖像』 p. 25.

〔註5〕 Inman. *Walter Pater's Reading*, p. 11.

〔註6〕 Lawrence Evans. *Letters of Walter Pater*, p. xxi.

〔註7〕 この辺りは Thomas *Walter Pater*, および 富士川義之 『ある耽美主義者の肖像』 を参照した。

〔註8〕 Richard Aldington. *Walter Pater Selected Works*, p. 79.

〔註9〕 *Miscellaneous Studies*, pp. 252-53.

〔註10〕 Edward Thomas. *Walter Pater*, p. 26.

〔註11〕 Monsmanによれば、会員の日記にその感想が記されているということだ。上村仁司氏が Monsman の *Oxford University's Old Mortality Society: A Study in Victoria Romanticism* について『日本ペイター協会会報』第21号中の書評欄で紹介してくださったが、生憎私はまだ、それを入手していない。

〔註12〕 Benson. *Walter Pater*, p.10.

〔註13〕 岩波文庫『キリストにならいて』 p. 19 を参考に訳した。

〔註14〕 *Of the Imitation of Christ*, p.6.

〔註15〕 岩波文庫『キリストにならいて』 p. 19.

〔註16〕 *Of the Imitation of Christ*, p. 225.

〔註17〕 *Ibid.*, p. 226.

〔註18〕 *Ibid.*, p. 168.

〔註19〕 *Ibid.*, p. 170.

〔註20〕 この世の事物も人間も超脱、否定される根拠は、『キリストにならいて』の第三巻第五十四章以降を見るとわかるように、ともにnatureということばで、括られていることを参照してほしい。

〔註21〕 とは言え、diaphaneité (透けている性格) は、静思と純一さとのお告げ(prophecy)のようなものであり、それがもたらされるのは生まれの巡り合わせや体質によってであり、しかも自然の秩序とは異なる恩寵の秩序によると述べ、合理的説明ではつかない要素の存在をペイターは認めている。

Miscellaneous Studies, p. 254

〔註22〕 ペイターはimmanent (内在している) という語を用いてはいないが、随所でlatent (潜在している) という語を用いている。“Diaphaneité”においても以下のように使用している。

In the character before us, taste, without ceasing to be instructive, is far more than a mental attitude or manner. A magnificent intellectual force is latent within it. It is like the reminiscence of a forgotten culture that once adorned the mind; as if the mind, ..., fallen into a new cycle, were beginning its spiritual progress over again, but with a certain power of anticipating its stages, (*Miscellaneous Studies*, pp. 254-5, 下線は筆者付す)

immanent「内在的」という語はtranscendent「超越的」という語と対概念で用いられることが多いので、後に触れられるように、超越的なものへの判断停止をしたペイターがimmanentを避けたのは当然なのであろう。ちなみに、上記引用箇所には、現在では世界の中に紛れ潜み見えなくなっている事象を自分の手で再び見出し、それを人間精神の新たなサイクルを開始する中核としたというペイターの強い意志が伺われる。後で論じるが、ここには「世界の再生」へ向けた彼の明確な意図を汲み取ることができる。また、ここにはピコ論との強い連関も見受けられ、これも後で触れるが、“Diaphaneité”と *The Renaissance* との強い結びつきを表わす好例といえよう。

〔註23〕 *Of the Imitation of Christ*, p. 36.

〔註24〕 Ibid., p. 36.

〔註25〕 Ibid., p. 51.

〔註26〕 Ibid., p. 62.

〔註27〕 Ibid., p. 166.

〔註28〕 Ibid., p. 166.

〔註29〕 *Miscellaneous Studies*, p. 253.

〔註30〕 Ibid., p. 259.

〔註31〕 Benson, *Walter Pater*, pp. 10-1.

〔註32〕 ベンソンはその中でこの作品が、a curious little study であると述べている。この文言から判断しても、彼がこの作品の真意をつかめていなかったことが理解できる。

〔註33〕 Benson, *Walter Pater*, p. 11.

〔註34〕 *The Renaissance*, pp. 85-6.

〔註35〕 *Miscellaneous Studies*, p. 252.

〔註36〕 *The Renaissance*, p. 78.

〔註37〕 *Miscellaneous Studies*, p. 253.

〔註38〕 Ibid., pp. 252-3

〔註39〕 Ibid., pp. 254-5.

〔註40〕 Hill's notes in *The Renaissance*, pp. 290-1.

〔註41〕 *Of the Imitation of Christ*, pp. 165-6.

〔註42〕 ヒルの註にあるように、初版のタイトルは *Studies in the History of the Renaissance* であった。第二版以降今日まで通行している *The Renaissance : Studies in Art and Poetry* に改題された。

〔註43〕 Hill's notes in *The Renaissance*, p. 290.

〔註44〕 *Greek Studies*, pp. 4-5.

〔註45〕 *Miscellaneous Studies*, pp. v-vi

- 〔註46〕 Inman. *Walter Pater's Reading*, p. 74.
- 〔註47〕 Lawrence Evans. ed. *Letters of Walter Pater*, p. 173.
- 〔註48〕 Edward Thomas. *Walter Pater*, p. 25.
- 〔註49〕 拙論「ウォルター・ペイター―「レオナルド・ダ・ヴィンチ」について」『湘南英語英文学研究』 Vol. 17 No. 6、1986年11月 参照
- 拙論「ウォルター・ペイター―「ジョルジョーネ派」の芸術論をめぐって」『国士館大学 教養論集』第22号 1986年 参照
- 拙論「ウォルター・ペイター―「ルカ・デラ・ロッビア」について」『信州豊南女子短期大学紀要』第六号 平成元年 参照
- 〔註50〕 *The Renaissance*, p. 95.
- 〔註51〕 *Miscellaneous Studies*, p. 253.
- 〔註52〕 保莉瑞穂編 『プルースト評論選』 p. 30.
- 〔註53〕 同書 p. 80.
- 〔註54〕 拙論「ウォルター・ペイターの『ルネサンス』における実証主義批判について」『信州豊南短期大学紀要』第二十号 平成15年3月 参照
- 〔註55〕 〔註8〕 参照

参考文献

- Lawrence Evans. ed. *Letters of Walter Pater*, The Clarendon Press, Oxford, 1970.
- Edward Thomas. *Walter Pater*, Michell Kennerley, New York, 1913, Reprinted by The Folcroft Press, 1970.
- A. C. Benson. *Walter Pater*, Macmillan, London, 1907.
- Walter Pater. *Marius The Epicurean*, ed., with an Introduction, by Ian Small, Oxford University Press, 1986.
- Billie Andrew Inman. *Walter Pater's Reading*, Garland, New York, London, 1981.

富士川義之 『ある唯美主義者の肖像』 青土社 1992年

トマス・ア・ケンピス『キリストにならいて』大沢章・呉茂一訳 岩波文庫
1986年

保苺瑞穂編 『プルースト評論選1』ちくま文庫 2003年

フリードリヒ＝ヴィルヘルム・ヴェンツラッフ＝エッケベルト『ドイツ神秘主義』横山滋訳 国文社 昭和62年

Encyclopaedia Britannica, 1968.